

広島大学 大学教育研究センター
大学論集 第13集(1984):1-17

エポニミー研究序説

— 科学社会学の試み —

新堀通也

目次

1. エポニミーの概念
2. エポニミーの科学社会的意義
3. エポニミーの種類と成層
4. エポニミーの機能

エポニミー研究序説

— 科学社会学の試み —

新堀通也

1. エポニミーの概念

エポニミー (eponymy) という単語がある。冠名語とでもいうか、ある特定の人物の名前を冠した単語あるいは用語をいう。例はほとんど枚挙にいとまがない。ニュートン力学、ボイルの法則など、人名を所有化 ('s, あるいは of), ないし形容詞化 (そのまま, あるいは ~ian などとする) して普通名詞と接続させた用語, マルキシズム, マルクストの如く人名を名詞化した単語, さらにはアレキサンドリア, ウェリントンの如く人名にあやかった地名, ワット, キュリー-の如く人名が小文字で始まる普通名詞化して単位となった単語などがそれである。

こうしたエポニミーのもとになった人名をエポニム (eponym) と称する。何れも語源的には *epi* (upon, after などの意) と, *onoma* (name の意) という二つのギリシャ語の合成語である。したがって語源通りにいえば「名前に基づいて」という意味である。そのためエポニミーとエポニムとは必ずしも厳密に区別して用いられない。19世紀中葉に出来たといわれるエポニムという語がエポニミーを表わす場合が最近は多くなっているようである。さらにエポニミティ (eponymity) という語も希に用いられるが, この語はアノニミティ (anonymity) との対象語として, 冠名性とでもいうか, 個々のエポニミーに共通に内在する性格に重点をおく集合名詞ないし抽象名詞である。

こうした慣用上の混乱はあるが, 本論文ではエポニミーを冠名現象 (冠名的語句), エポニムをその起源となった人名として区別することにする。

エポニミーは一見, 語源 (etymology) ないし命名 (naming) に関する言語学上の問題であり, また好事家的興味の対象にすぎないと思われるかもしれないが, エポニミーは科学社会学にとって重要な手がかりを与える現象となりうる。それについては後に述べるが, エポニミーが拡大解釈して用いられる場合がある。例えば教科書や学史に人名が登場する場合, これをエポニミーと称する例がある。レクラインはその二つの論文において, 代表的な心理学教科書に記載された心理学者の名前を分析してエポニミー研究と称している。¹⁾ こうした研究自体は, ある学問に対する個々の学者の貢献度や承認度による歴史的地位を評価するのに重要ではあるが, こうした現象までエポニミーと称することには無理がある。

このような研究はむしろ引用分析 (citation analysis ないし citation counts) の延長線上にあると考えられる。オーダム, ベイン, オロメナーたち²⁾ はこの角度から社会学の教科書に記載された社会学者を分析しているが, この場合, オロメナーの論文の一つのタイトルからも推測できるように,

* 広島大学・大学教育研究センター長

それは人名が教科書に引用 (cite) されているという現象を対象にしているのだから、エポニミーというより引用の一種という方が適切である。ふつう引用分析では、専門学術論文の中で、特定の先行論文の著者たる人名が分析される。³⁾しかし、この場合は、個々の論文を越えてトータルな業績によって人名を引用するのであるから脚注や参考文献として業績(論文や著書)は必ずしも引用されず、人名だけが本文中に指名されるのである。

この種の研究は通常の引用分析とエポニミー分析との中間に位置付けられるとあってよいが、用語の上でこれをエポニミーと称することは不適當であろう。適切な用語、術語は見当たらないが、このような人名引用の仕方を指名 (mention, nomination, reference) と称するなら、指名の研究は通常の引用分析よりはるかに個々の学者の地位や評価を測定するためには重要であろう。それは個々の学者とその業績をトータルにとらえて、教科書や学史や専門辞典の中で指名し、しばしば独立項目としてエントリーするから、当該学問における歴史的地位がその分析によって明らかとなるはずである。

特にいわゆる人文・社会系の科学においては、重要な学者ほど個々の論文というより、トータルな業績、理論を通してその学問の発達に貢献しているから、こうした指名分析が有効である。したがってエポニミー分析を行うさいには、それぞれのエポニムの重要度、承認度などとの関係を知るため、当然この指名分析の援用が必要となる。指名は用語の上からは広義の引用に入るが、機能的にはむしろエポニミーに近いとあってよい。

もちろんこの指名の研究がどこまで可能か、またそこから得られる結果がどこまで客観的に妥当するかには、多くの問題がある。すでにオロメナーの研究が明らかにしている通り、教科書は主として学部的一般教養課程段階の学生をオーディエンスとして想定して書かれているから、必ずしも現在の当該科学(彼の場合は社会学)の基礎理論の構築に貢献した人びとを指名していない。そのため彼は専門研究志願者をオーディエンスとする大学院の必読リストと教科書とを比較した。⁴⁾また学問には時代によって一種の流行現象があるし、教科書の編者や著者にはそれぞれの立場や好みがある。構造機能主義的均衡理論や実証主義がいわば社会学のパラダイムになっていた時代の教科書、またそれを奉じる人が編者や著者となっている教科書では、葛藤論や現象学が有力となった時代の教科書、その立場に立つ人が作った教科書とはちがう社会学者が多く取り上げられるであろうし、同じ人物を指名するにしても、その扱い方や説明に費す分量は異ってくる。歴史的記述を主とした学史的教科書と概論的教科書とでは、指名される登場人物も異なるであろう。同じように指名される人物であっても、その重要度を説明の分量によって判定するか、回数によって判定するか、項目として独立しているか否かによって判定するかなど、いろいろな指標や基準が考えられるが、教科書が多様である以上、何れにも多くの方法論的難点がある。この指名分析を通して、各国の教科書を比較するなら、国際的な承認度や知名度が明らかになる(例えばどの国の教科書にも出現する人物は国際的に一致して承認されていることになる)と考えられるけれども、これまた同種類、同分量の教科書の選定は至難とあってよい。こうした研究からは評価におけるエソセントリズムが明らかになるように思われる。⁵⁾

いうまでもなくエポニミーは単に学問や思想の分野に出現するだけではない。またその起源となる人名にしても実在する人物だけではなく、仮空の人物、例えば神話や小説中の人物である場合もある。エポニミーがいかにかに多様な分野に出現するかは、興味ある事例を集めたピーチングの辞典⁶⁾を見れば明らかである。しかしすでに引用分析と指名分析とを比較して論じたさい示唆しておいたように、われわれがエポニミーに興味を抱いたのは科学社会学の立場からである。

2. エポニミーの科学社会的意義

高等教育の社会学 (sociology of higher education) にとって、科学社会学 (sociology of science) は不可欠かつ最も重要な理論を提供してくれる。高等教育、中でも大学には教育と並んで研究という機能が与えられていることはいうまでもない。その教育も科学、学問を基礎とし、またその一部として将来の学者、研究者の養成を含んでいるから、大学を研究機関として分析することが要請される。したがって高等教育の社会学には研究の研究、科学の科学の代表たる科学社会学が参加しなくてはならない。

もちろん科学社会学の研究対象は広範だが、その重要な分野の一つは学問的生産性 (scientific productivity) である。学問的生産の規定条件は何か、その評価や報賞はいかなるシステムをもつかなどの問題を、科学社会学は最も熱心に扱ってきた。科学者は同じ専門家仲間、同学の士からの承認という報賞を求めて競争するのか、未知・未解決の問題に対する抑えがたき知的好奇心や探求心の故に研究に没頭するのか、という研究の動機づけについては必ずしも一致した見解はない。⁷⁾

しかし何れにせよ、現実の科学者は必ずしもそうした科学の世界 (scientific community) でだけ生活しているのではないことはたしかである。彼らが所属する大学や研究所は学界を取りまき支える世俗的な一般社会の一部であるから、彼らは一般人から超然として生活しているわけではない。彼らに対する報賞や承認も決して同じ専門家仲間 (同じ専門家といっても、科学の専門分化が進めば進むほど少数となる。中でも最先端あるいは未開拓の分野の研究の専門家とは厳密に言えばただ一人である。) だけによって与えられるのではない。程度の差はあれ、非専門家 (すなわちその研究に関しては素人) によって評価されるのである。学界や専門が独立自存する完結体でない以上、科学の評価体系、報賞体系も一般社会、非専門家によって大きく条件づけられているはずである。日常的な現象でいえば、科学者は有利な研究条件や地位を手に入れるためにも、自己の研究の独創性や有用性を広く一般社会にPRし、一般社会から評価、承認されようとする。この場合、彼らはむしろ非専門家、一般社会からの承認を求めて競争しているといつてよい。

こうした状況を考えるとき、エポニミーの科学社会学的研究、中でも科学的生産 (業績) や科学者に対する評価体系、報賞体系の研究にとっての意義が明らかとなる。それは、すでに触れた通りエポニミー分析と引用分析、指名分析とを対比整理することによって理解できるであろう。

まず第一に、エポニミーは極めて長期の評価体系、報賞体系の中に位置付けられる。周知の通り今日、科学的生産の評価、中でもその質の判定の客観的指標として用いられるのは引用であり、引用分析を用いた多くの研究が蓄積されている。しかし引用分析の対象となるのは、専門学術雑誌である論

文がどの程度、同じ専門分野の同僚によって引用されたかという事実である。科学の発達速度は極めて早く、研究成果の寿命は極めて短いから、同じ研究成果が引用される回数は時間の経過とともに急速に減少することが明らかにされている。⁸⁾

しかしいうまでもなく引用されなくなったが故に、その研究の価値、中でも科学の発達に貢献した歴史的価値が減少することにはならない。その点からいって引用分析による研究の質の評価には限界がある。科学の発達に影響を与える重要な研究と判定する長期的、歴史的な評価の方法として、引用分析は不適切である。これに対して指名分析の方がはるかにすぐれていると考えられるものの、そこには上に述べたように数多くの技術的問題がある。

引用分析の発達にとって最大の資料となったのは、1960年代以後出版され始めた *SCI* (自然科学)、*SSCI* (社会科学)、*A & HCI* (人文科学) である。それらはなお、収録論文の母体となる専門雑誌の範囲(主として国と使用言語からくる制約、特に社会科学、人文科学においては非専門雑誌や書物の扱い)という大きな問題を残しているにせよ、一応、引用分析の共通の基礎資料としては公認されているといつてよい。

ところが指名分析には未だこうした公認された共通の基礎資料が存在しない。つまり誰が、あるいはいかなる業績が科学の発達に貢献したか、またそう承認され評価されているかについて、判定するための共通の基礎資料が欠けているのである。標準的、中でも国際的な専門辞典や科学者人名辞典(例えば *DSB*, *World Who's Who in Science* など)はそうした基礎資料になりうると思われるにしても、なおかつ出版国や編集者による多くのかたよりが認められる。

こうして引用分析と指名分析との限界を補う方法として、エポニミー分析が考えられるのである。エポニミーは編集者や著者、レフェリーやゲートキーパーの個人的、主観的な判断を超越した客観的な現象であるし、一旦成立し承認されたエポニミーは半永久的に人類のポキャブラリーの中に組み入れられる。したがって、このエポニミーを手がかりにした評価が考えられるが、引用分析における *SCI*, *SSCI*, *A & HCI* に匹敵するだけの基礎資料が最近出版された。それが J. A. Ruffner, ed., *Eponyms Dictionaries Index*, 1977, Detroit, Michigan: Gale Research Company (以下 *EDI* と略す) である。この辞典は科学はもとより、文学、宗教、スポーツなど60にわたる広範な分野におけるエポニミーならびにエポニム(この辞典ではこの両者をともにエポニムと称している)を徹底かつ体系的に収集している。収録されたエポニムは約13,000名、エポニミーは約20,000である。これによってエポニムの生没年、国籍、専門分野、さらにそのもつエポニミー、資料出典を知ることができる。エポニミーについてはそのエポニム、分野、資料出典が記載されている。これほど完全なエポニミーの基礎資料は今まで存在しなかったし、そこに載せられている資料出典をカテゴライズし、レベル化するなら、エポニムとエポニミーの評価範囲が知られる。(例えば *DSB* に収録されたエポニムは学界一般で評価されていると判定され、一国の *Who's Who* に収録されたエポニムはその国の社会一般で高く評価されていると考えられる。)

もしわれわれが考えるように、エポニミーが引用分析に対抗しうる科学や科学者の評価資料になりうるとすれば、この EDI によって恰好の基礎資料が得られたというべきであろう。図式的に言えば、評価のタイムスパン、寿命の点から、引用分析は現在を起点として最も短期に妥当するに対し、エポニミー分析はそれが出現した過去を起点として最も長期間、持続する（指名分析はその中間に位置する）。

第二に、評価主体の点から、評価者は引用（指名も）にあっては同じ専門分野の同僚であるのに対し、エポニミーではそうした特定の個人を越えた、いわば社会一般である。人名をもとにした新しい語句が成立し、それが当該専門分野の人びとだけでなく、広く社会一般に受け入れられ通用するようになるのが、エポニミーに他ならない。もっとも後で指摘するように、またエポニムについて上に述べたように、エポニミーの通用範囲も極く狭い専門仲間だけの場合、広く学界全体の場合、さらに社会一般の場合といった風に広一狭という尺度をとってみれば区々である。エポニミーの中には、狭い範囲の専門家社会だけでなく、社会一般の共有財産としてふつうの辞典にエントリーされ、単位のように普通名詞として広く使用されるものがある。エポニミーは固有名詞たる人名を冠するという点でパーソナルな性格が強いが、普通名詞化して辞典に記載されるという点ではインパーソナルである。

誰が引用し誰が指名したかは特定できるが、誰が冠名したかは必らずしも特定できない。冠名語は評価者や命名者から離れて、いわばひとり歩きする。引用や指名ではその主体が同じ専門家仲間であるのに対し（その中でも引用は最も狭い専門分野の同時代の研究者であるが、指名はもっと広い範囲の研究者、中でも概論執筆者や科学史家であり、彼らは長期、広範な視点から指名する）、冠名ではその主体は誠に区々である。当人自身、弟子、専門家仲間、専門機関、一般社会などが冠名主体になりうる。しかしそれがエポニミーとして定着したことは、社会一般がそれを評価承認したことを意味する。

逆にいえば引用され指名された科学者は当該専門分野への貢献を承認されたことになるが、冠名された学者は何らかの程度、専門分野を越えて社会一般に貢献したことになる。

第三に、すでに触れたように、また今述べたこととも関係して、引用分析における評価対象は極めて狭い分野の業績であるのに対し、指名分析ではむしろ被指名者（ふつう最も卓越し、それぞれの分野で最大の影響を与えた大学者、新しいパラダイムの提唱者）のトータルな業績、一般理論が評価対象となる。評価対象は少なくとも科学のエトスたる普遍主義（universalism）からいって、特定個人という属性原理的個別主義（particularism）を超えたインパーソナルな業績自体である。引用では論文の著者ではなく、論文が引用されるのである。

これに対してエポニミーの種類は極めて区々であるが、特定個人を冠名しているという事実自体、エポニムの評価となることを示している。例えばエポニミーによって、そのエポニムは長くかつ広く記憶される。中でも～イズムとか～理論とかといった、最も基礎的かつ包括的な分野に関するエポニミーは、そのエポニムのトータルな業績に対する評価であり報賞である。エポニミーとして客観化さ

れているだけに、エポニムのトータルな歴史的地位を客観的に評価するのに適しているといわねばならない。

第四に、これも評価領域に関する特徴だが、引用分析はその基礎資料として *SCI* の他に、*SSCI*、*A. & HCI* をもっているとはいえ、社会科学や人文科学については多くの制約があるし、また最も広く行われているのは *SCI* を利用しての自然科学分野の引用分析である。社会科学や人文科学については、学者や学問的生産（業績）の評価は、引用分析より指名分析の方がはるかに有効であろう。しかし指名分析には上述の如き方法論的、資料的難点があるので、これに代わるものとしてエポニミー分析が考えられる。

実際、エポニミーは単に学問だけではなく、ほとんどあらゆる分野に見られる現象である。ある人物が学問のみならず、芸術、宗教、さらには政治、経済など、文化や社会一般に画期的ともいえる影響を与えた理論、例えばキリスト教、プラトニズム、カント哲学、マルキシズム、ダーウィニズム、フロイド主義などは何れも最も高度のエポニミーである。それらは理論としてもトータルだが、その影響の範囲や仕方もトータルである。かかる評価は引用分析によってはとうてい不可能である。

第五に、エポニミーは独創性の判定に有効である。独創性は創造性とはちがって歴史的概念であり、新しい事実、理論、解釈、技術、道具などの発明発見が独創性の具体化に他ならないが、エポニミーはまさにそのエポニムの発明発見に対して与えられる名称であり、エポニムがいて初めて成立する現象である。もちろん同時発見（multiples）の事実が示し、ネオロジズムの理論⁹⁾が明らかにする通り、完全に独創的な発明発見が存在するか否かは疑問だが、エポニミーは少なくともそのエポニムに先取権（priority）を社会が認めたことを意味する。

引用分析が業績（achievement）の専門的評価に適し、指名分析が貢献（contribution）の歴史的評価に適しているとすれば、エポニミー分析は独創性（originality）の社会的評価に適しているといつてよからう。引用では現在の最高、最先端の水準からある業績を評価して引用するのであり、指名では現在からみた学問の歴史的発展という基準によってある人物を評価して指名するが、エポニミーはそれぞれの時点で新しいか否かという基準によって、エポニムを評価する。それ故、エポニミーによって示される独創性には、現在の水準からみて、あるいは歴史的重要性からみて、高く評価されえざるものが数多く含まれている。エポニミーないし、その起源になったエポニムは何らか程度、独創的であるとはいえ、独創的であるということと、学問的、歴史的価値が高いこととは必ずしも平行しない。エポニミーすべてがそのまま学問的生産（業績）の質の評価にはつながらないけれども、エポニミーは独創性の判定にとって便利である。

以上、五つの理由によってエポニミーは科学社会学における科学の生産性、中でもその評価体系や報賞体系の研究に対して、引用分析ならびに指名分析の欠点や限界を補う実証的研究方法を提供してくれると期待される。それにもかかわらず、科学社会学でエポニミーという現象に注目した人は極めて少ないし、それを体系的に分析した研究に至ってはほとんど皆無に近い。

3. エポニミーの種類と成層

エポニミーの科学社会学的意味を最初に指摘したのは、この学問の発展に決定的な役割を演じたマーティンである。しかしその後、エポニミーを本格的に分析した人は、ほとんどいない。彼はその著『科学社会学』（R. Merton, *The Sociology of Science*, 1973, U. of Chicago P.）に収録された論文「科学的発展における先取権」（“Priorities in Scientific Discovery”）（もっともこの論文はASAの1957年次総会の会長講演として発表され、同年12月の *ASR*, vol. 22, no. 6 に印刷されたものである。なおこの章は同書第4部「科学の報賞体系」の中に位置付けられている）において、科学的成果や科学者に対する多種多様な承認や報賞のうち、エポニミーはその筆頭に位するとした。

彼によれば、最も包括的、基礎的な業績、科学の歴史に新紀元を画するほどの貢献をなしたと評価、承認される理論に冠せられるエポニミーとしては、～の時代（例えば Newtonian Epoch, Darwinian era, Freudian age）がある。新しい科学や専門分野やパラダイムを開拓し確立したと評価される人に対しては、～の父（例えば病理学の父モルガニ、予防医学の父ジェンナー、科学的教育学の父ヘルバルト、社会学の父コント）とか～学（例えばヒポクラテス医学、アリストテレス論理学、ケインズ経済学）とかという呼称が与えられる。彼らはこうしたエポニミーによって科学の歴史にいわば不朽、不動の地位を与えられるのである。

もっとも科学の発達、分化につれて、父となる人の数はいくらかでも増える。例えば化学の父ボイルの他に、気体化学の父プリーストリー、近代化学の父ラヴォワジエ、物理化学の父ギブズなどといった具合である。また父として指名することは固有の意味でのエポニミーには数えられない。むしろわれわれの分類でいえば、指名分析の対象であろう。特に専門分化した狭い分野での父は、その専門家にしか知られていないし、その指名は指名者、例えば科学史家や弟子の主観的判断による場合がある。またあらゆる科学はその歴史的起源をたどっていけば、ギリシャ、アラビア、中国などに萌芽と源泉を認めることも可能だから、父の前には父、さらにその父といった風に多くの父が見い出されるにちがいない。

そこでエポニミー分析の対象としては「の時代」とか「の父」とかといった歴史的叙述の対象ではなく、科学的概念、専門用語として確立し承認されたエポニミーに限定する必要がある。マーティンがいうようなある学問の原型を形成した人名を冠したエポニミー（～学）の他、～イズム、～主義（マルキシズム、プラトニズム、デュルケミズムなど）などのエポニミーが最高位に位置する。

こうした最も基礎的、包括的な理論や体系に関して与えられるエポニミーの次には、同じように基礎的ではありながら、より限定された範囲内に適用され公式化された説明原理がある。特に自然科学ではこの種の理論の役割が大きい。画期的と称されるこの種の理論の多くは、提唱者の名を冠して評価され周知される。法則、定理、公理、原理など（例えばボイルの法則、ピタゴラスの定理など）がその例である。こうした名称とほとんど同列ないしやや下位にある説明原理、説明概念としては理論、仮説、説、モデル（例えば湯川理論、アボガドロ仮説など）がある。

つづいて方法、図式、近似式、関係式などの研究技術に関するエポニミー、現象の規則性を示すための運動、曲線、規則、効果などのエポニミーがあり、最も下位レベルに位置するエポニミー（とはいえ、それは必ずしも科学における価値、科学の進歩、さらには人類の幸福にとって価値が少ないことを意味せず、妥当の範囲が狭いことを意味する）としては、研究、実験、治療、診断などのための新しい用具、装置、テストの発明に冠せられるエポニミー、さらに個別的な事物の発見に冠せられるエポニミーがある。医学や心理学などの分野にはこうした種類のエポニミーが極めて多いし、動植物学、天文学、地理学などでは素人の発見にかかる動植物名、星の名、地名にエポニミーが多数見出される。¹⁰

他方、上位にありながら別のカテゴリーのエポニミーとして、単位、元素、定数などがあり、それらはワット、キューリーのように小文字で始まる普通名詞となったり、アンペアがAというイニシャルだけの記号となって用いられたりして、科学はもちろん日常生活でも広く使用される。¹¹

以上のように多種多様なエポニミーはその通用範囲あるいは評価範囲の広狭、理論水準や科学的価値の上下によって一定の成層をなしている。このように上下、広狭という二つの軸によるマトリックスを作ってみると、①広く学問全体にとっての価値が高く、また広く一般社会に影響を与え周知されたエポニミー、②学問的価値は高いが、狭い専門家仲間にしかなんて承認されず、狭い専門分野にしかなんて貢献しないエポニミー、③学問的価値は高くなくても、広い影響力をもち広く利用され知られているエポニミー、④学問的価値も低く、狭い範囲にしかなんて影響を与えず知られていないエポニミー、という四つが図式的に考えられる。もちろん上に述べたように、この上下、広狭はそれぞれさらに何層にに区別することができる。

操作的、具体的にいえば、独立項目として一般の辞典（百科辞典や国語辞典）に収められているもの、科学辞典に収められているもの、医学辞典に収められているもの、内科学辞典に収められているものという風な順に従って、そのエポニミーの通用範囲、承認範囲は広から狭へと移行する。一般にはより広い通用範囲をもったエポニミーは、より狭い辞典にも収録されるはずだが、一般的な辞典に収められながら、専門的な辞典に収められていないものがあるのは、それは科学的価値が低いにもかかわらず、広く通用していることを示す。上に挙げた図式による①はこれらすべての辞典に収録されていること、②は一般辞典以外のすべての辞典に収録されていること、③は一般辞典にのみ収録されていること、④は最も狭い専門辞典にのみ収録されていることによって、ある程度、判定することができる。

これはエポニムについても妥当する。人名辞典を資料としてみるなら、国際的な重要人物を網羅する人名辞典に収録された人、国際的な科学者人名辞典に収録された人、一国のみの人名辞典に収録された人、一国のみの科学者人名辞典に収録された人、さらに専門別の人名辞典に収録された人などを知ることによって、その承認や評価の範囲の広狭と程度が上下が判定される。こうして知られるエポニミーの構造とエポニムの構造とを対比させるとき、業績と人物との評価体系の一貫性の程度が明らかとなろう。すべてのエポニミーは引用の如く一回限りではなく、永続的な承認を受けるのであり、そ

の由来するエポニムはエポニミーによっていわば不朽の名をとどめるのだから、エポニムにとって大きな榮譽であり報賞であるといつてよいが、中でも①に属するエポニミーに対応する正当な評価を与えられたエポニムにとって然りである。

もっとも今まで述べてきたように、単語の種類によってのみエポニミーの上下の成層的地位を単純に決定することは危険である。厳密を尊ぶ学問にとっては奇妙なことだが、用語や概念がいろいろな意味で用いられ、異なる用語や概念がほとんど等価に用いられることが多い。¹²⁾ これは成層的に上位にあると考えられるエポニミーの単語、ならびに人文、社会科学に特に顕著なように思われる。そのため表現上は同類のエポニミーでありながら、明らかに同位と認定できない例がある。例えば同じイズムという語尾をもつにしても、同じ系列の理論に属するマルキシズム、トロツキズム、スターリニズム、毛沢東主義、さらには福本イズム、山川イズムなどを一括して学問的あるいは社会的に同列、上位にあると認定することは不適切である。人名を冠した学問名にしても、プラトン哲学、ケインズ経済学など定着したものもあるが、有象無象の哲学者、経済学者に対しても特に弟子たちが～哲学、～経済学の名を奉ることができる(わが国にはその例が多い)。～理論、～学説なども同じである。

現代、法則(law)という名称が嫌われ、その代りに説(theories)、原理(principles)、規則(rules)という語を用いる傾向があるとビーバーは指摘した。¹³⁾ またボーリングはさらにモデルという語が法則、理論と同義的に多用されるようになってきているという。¹⁴⁾ 科学は不断の発展であり、たえざる否定、批判、変革によって成立するので、固定し変更を許さない真理を認めず、真理の過渡性、相対性が今日の科学者の信念となっているし、法則の名に値しない法則があまりにも多すぎるので、法則というレッテルが嫌われるようになったというのである。エポニミーの成層については、こうした事情を十分に考慮する必要がある、それはエポニミー分析の困難性と限界であると同時に、それが明らかにすべき研究課題でもある。

4. エポニミーの機能

エポニミーについては研究が少ないだけに、その成立過程は十分知られていない。エポニミーを榮譽的報賞と一括することは無理であろう。例えば前に述べた通りエポニミーの命名主体は本人自身、弟子、国際的機関、科学史家、一般社会など区々である。本人自身や弟子によって命名されたエポニミーをユニバーサリスティックな評価体系の中に位置付けることは不合理であろう。また命名時期についても、発明発見と同時の場合もあれば、はるか後世になってからの場合もある。各種の理論との相違を浮き立たせるために贈られるエポニミーもあれば、誤りを指摘するために命名されるエポニミーもある。

ボーリングは1963年、ワシントンで開かれた第七回国際心理学大会の名誉会長講演において、学者にとって自己の学問の歴史は、現代の時代精神(Zeitgeist)から、自己の利益になる考えを再発見し、自己の関心対象の意味を認知させる文脈を与えるものであるとし、歴史の歴史、つまり事実の叙述の様式に注意しなくてはならぬと主張し、三つの歴史理論を分類した。すなわち第一は歴史は神

意によって決定されるとする神意説，第二は歴史に偉人の意志と権力に帰因するとする偉人説，そして第三は偉人の決定を独立して起きる自由と見なさず，独創の前には必ず先行者があり，独創は過去から自由ではないと主張する決定論 (determinism) である。科学史も第二の段階，すなわち「大科学者」の列伝的記述から，第三の段階，すなわち特定の偉人の独創の結果より，その原因としての長期のトレンドを重視し，科学史を非人格化 (depersonalize) する方向へと移行しつつあるし，また移行すべきである。

この決定論的立場をとるボーリングは，エポニムを好むのは偉人説的歴史観であり，エポニミーは気休め (placebo) にすぎないと主張する。¹⁵⁾

エポニミーが必ずしも歴史的客観的に独創性の証明にならないことは，同時発見という事実によって裏付けられる。同時に複数の人によって発見されながら，そのうちの一人にその先取権が認められ，エポニミーが与えられるからである。同時発見はまた科学の発達が時代の流れによって起きるのであって，特定の個人の天才的発見がこの流れを変えうるか否かが疑問であることを示している。ベートーベンの創作はベートーベン以外の人によって作曲されることはないが，ニュートンの発見はたとえニュートンがいなかったにしても，若干の時間的ずれはあるかもしれないが，早晚，誰かによってなされていたであろう。つまり科学が一定の水準に達して「機が熟する」なら，条件の似た社会において，同時に同じ発見が行われるはずである。

この同時発見の事実はオグバーンによって初めて注目され，マートンやバーバーによって先取権争いという点から科学の報賞体系論の中に位置付けられた。¹⁶⁾ オグバーン＝タマスは 148 の同時発見の例を報告し，マートン＝バーバーはこのオグバーンの同時発見の発見さえ，20 の先行者 (例えばマコーレー，コント，ブルイスター，アラゴ，ゴルトン，エンゲルス，アインシュタイン，クレーバー，サートン) によって主張されていたことを指摘している。マートンらは 264 の同時発見を分析し，その $\frac{2}{3}$ は二重発見 (doublets)， $\frac{1}{5}$ は三重発見 (triplets)， $\frac{1}{7}$ はそれ以上の多重発見であり，その中には九重発見の例が二つあると報告している。

2 人のエポニムの名を冠したエポニミーには 2 人が共同で発見した場合もあるが，2 人が別々に同一の発見をなした場合もある。例えばベル＝マジャンディの脊髄神経根の法則，ベル＝ミュラーの神経エネルギー説，ジェームス＝ランゲの感情説などは同時発見でもないし，先行者 (上の例でいえば，ベル，ベル，ジェームス) から後行者 (マジャンディ，ミュラー，ランゲ) が影響を受けていたかどうかとも明らかではない。ところがこのようなエポニミーによって，人びとはそれが同時発見であるかの如く考え，二人に同じ先取権を認めようとする。¹⁷⁾

ボーリングはエポニミーの機能を心理学的に説明した。彼によればエポニミーには三つの心理学的原理が働いている。その第一は注意の幅である。人間の注意の範囲は限られているので，偉人は少数でなくてはならず，人びとは最も卓越した人物に焦点を合わせ，これを誇張するという単純化を行う。ベーコンの『新オルガノン』(*Novum Organum*) は当時広く行われた帰納法を説いたにすぎないが，ベーコンはその象徴と見なされたのであり，それはエポニミー的歪みの例である。第二は人間の群居

性である。群を作ろうとする人間は群の中心となる英雄を求めるが、この英雄がエポニムとなる。フォロワーシップへの要求といってもよい。第三はリーダーシップへの要求である。百科辞典に無署名の論文を書くより、雑誌に署名入りの論文を書くことを好むように、エポニミーという荣誉が研究者に目標と動機付けを与える。

クーンは条件反射説を例にとりながら、同時発見とエポニミーの関係について興味ある分析を試みている。¹⁸⁾ 条件反射はパブロフの発見とされ、エポニミー化しているが、彼と同時にこの現象を発見し発表したトゥイットマイヤーは無名のうちに埋もれた。この事実については、条件反射という生理学的法則は当時の心理学者（トゥイットマイヤーは心理学者であり、この発見は心理学会で発表された）には興味もなく理解もされなかったとか、トゥイットマイヤーには自分を売り込むセールスマンシップがなく、その論文は自費出版されて広い販路をもたなかったとか、パブロフは当時すでに研究者仲間から尊敬され注目されていたのに対し、トゥイットマイヤーは無名の新人であったとか、各種の説明がなされるが、社会的、知的な文脈が同時発見の一方をエポニミーにする傾向があることを物語っている。

したがってエポニミーを単純に独創性の指標とすることにはかなりの危険がある。エポニミーはその発明発見が客観的に独創的である（つまり事実として歴史上、最初である）ということの証明にはならない。しかしそれは少なくとも社会から独創的と承認され評価されたことを示している。エポニミーは社会的な評価体系、報賞体系における独創性の指標なのである。萌芽や前身を探るなら、いくらでも先行者がいるであろうし、時を同じくして同一の発明発見が行われているかもしれない。しかし社会が誰に先取権を与えるか、誰に独創性を認めるかは、エポニミーによって知ることができる。エポニミーだけに頼ることはもちろん無理だが、エポニミーが科学的生産や科学者の社会的評価に当たって、極めて重要な実証的指標となりうることは疑いない。

その他にも評価体系、報賞体系の研究におけるエポニミーについては各種の疑問や限界がある。第一に学問的にも重要であり、社会的にも高く評価され承認されながら、エポニミーになっていない業績、エポニムになっていない学者が存在する。第二に、最初エポニミーであった業績がアノニミティ化することがある。例えばアインシュタインの相対性原理は単に相対性原理といわれ、フロイド主義は単に精神分析、パブロフの条件反射は単に条件反射といわれるようになる。第三にイニシアル化されたエポニミーはエポニムから独立して用いられ、エポニムは忘れ去られてしまう。その他にも島田が分類しているように、専門家でなければエポニミーと判定されず、エポニムを連想できないエポニミーがある。¹⁹⁾

しばしば論じられることだが、第四にエポニミーは時代とともに減少するのではないか、同じように重要、独創的と評価される業績であっても英雄崇拝的なエポニミー、すなわちパーソナルで個別主義的な報賞を与えず、インパーソナルで普遍主義的な術語によって表現するようになるのではないか、という問題がある。そうなればエポニミーを評価、報賞の指標とすることは不適當である。この傾向は次のような事情によって支えられている。科学が専門分化を重ね、極端にいえば一専門に一人の専

門家しかいないという状況が生まれるなら、研究者には競争相手がなくなるので先取権争いも減少し、エポニミーの価値も低下する。共同研究が増加するにつれて、個人名を付したエポニミーは減少し、機関名を付したエポニミーが増える。すでに述べたように科学の進歩につれて最も重要で画期的な発明発見（例えば法則）はすでに実現してしまっているのだから、エポニミーも些細な価値しかもたない業績とか、新興、未開拓の専門分野に限られるようになる。独創より改良、基礎理論より応用技術に長じた国（日本はそうだといわれている）には上位のエポニミーは少ない。

第五に、こうしてエポニミーには時代の条件や科学の発達段階という条件が大きく作用しているばかりでなく、国や社会による差があるかもしれない。例えば個人主義的な競争が重んじられる社会はエポニミーを生みやすいであろう。もしそうなら、エポニミーは西欧近代社会の産物であり、たとえ同じような価値をもつ業績でも非西欧社会では個人に功を帰するエポニミーの荣誉を与えないであろう。同時発見の場合、知名度が既に確立している人がエポニムとなり、共同研究の場合実質的に研究の担い手たる共同研究者ではなく指導者がエポニムとなるというマタイ効果の程度も国による差があるかもしれない。

さらにエポニミーにはエスノセントリズムが作用しているかもしれない。例えば国籍のちがう二人の科学者による同時発見の場合、それぞれの国は自国の科学者のみをエポニムとするエポニミーを作り出すかもしれない。エポニミーの通用範囲に広狭があることはすでに指摘した。

以上とも関係して第六に、エポニミーは学問分野によって、その出現や種類が大きく異なるであろう。エポニミーが出現、成立しやすい学問分野がある一方、そうでない学問分野もある。例えば共同研究が主流となる学問、成熟の域に達した学問はエポニミーが生まれにくい。中山茂のいう論争的学問ではレベルの高いエポニミーが、記録的学問ではレベルの低いエポニミーが生まれやすい。²⁰⁾ 基礎科学、虚学と応用科学、実学との間にも同じ傾向が見られるであろう。個々の事実、器械などを発見発明することによって得られる、レベルの低いエポニミーにしても、天文学、動植物学、地理学などでは素人をエポニムとするエポニミーが生まれやすいが、医学や心理学などでは専門学者をエポニムとするエポニミーが生まれやすい。地名についていえば、君主、政治家、軍人、学者、芸術家、探検家、外国の有名人など各種の人がエポニムとなるが、その傾向を分析してみると、それぞれの国の文化や国民性がある程度分かるように思われる。興味ある文化人類学的研究であろう。人文科学では自国だけが通用範囲であるエポニミーが多い。

以上のようなエポニミーのもつ問題点、予想される仮説の検討、実証こそがエポニミー分析の目標ないし解決すべき課題である。くり返すまでもなく、評価や報賞とは社会的な現象であるが、その社会には科学という社会（学界）だけではなく、学界を取り囲み支える一般社会（科学外社会）が含まれ、一般社会も評価や報賞を与える。その学界も決して単一ではなく、学界の内部にある程度、相互に独立した専門別の学界が何層にもわたって存在する。スノーがいうように自然科学と文化科学は相互理解も困難な別世界をなしているし、²¹⁾ その自然科学も物理学や化学などという大分野はさらに原子核物理学、放電物理学、構造化学、分析化学などなどとほとんど無限に細分化している。したがっ

て科学や科学者に対する学界の評価、報賞は専門家によって行われるとはいうものの、どの範囲を専門家と見なすかは極めて微妙である。細かな専門以外の学者はすべて素人なのであり、個々の学者にとっては学界の中にすでに少数の専門家と多数の素人が含まれていることになる。

引用分析の考える専門家とはせいぜい上の例でいえば物理学や化学という大分野それぞれの構成メンバーであって、それ以上の範囲の学界のメンバーは評価者、すなわち引用者になりえない。恐らく科学の進歩、専門分化が進めば進むほど（そのため狭い分野の学術雑誌が増え重要になる）、評価や承認の主体となる専門家、その構成する学界もますます限定されてくるであろう。エポニミーはこうした限界をもたない。それは狭い専門分野の仲間だけでなく、学界全体、さらには社会一般からの評価や承認の指標となる。

他方、エポニミーには学界の中でも個別主義的な属性原理が支配する範囲内でのみ通用するものがある。そう考えるとエポニミー分析は科学の社会的評価体系、報賞体系を明らかにする上で極めて重要かつ有効な方法であるように思われる。それによって学界の構造、科学と一般社会との関係がある程度知られるであろう。引用分析によって専門的評価の程度は分かるであろうが、社会的評価の程度は分からない。社会的評価の程度を教えてくれるエポニミーを分析するなら、学界での評価と一般社会での評価がどの程度、一致するかが知られるであろう。

注

- (1) J.E. Roedelin, "Eponymy in Psychology," in *American Psychologist*, July 1972, pp.657-659; "Eponymy in Psychology: Early versus Recent Textbooks," in *Psychological Reports (Contributions to the History of Psychology, XIV)*, vol. 34, 1974, pp.427-432.
- (2) H.W. Odum, *American Sociology: The Story of Sociology in the United States through 1950*, Longmans Green, N.Y., 1951; R. Bain, "The Most Important Sociologists?" in *ASR*, vol. 27, pp.746-748; M.J. Oromaner, "The Most Cited Sociologists: an analysis of introductory text citation," in *American Sociologist*, vol. 3, 1968, pp.124-126; "The Audience as a Determinant of the Most Important Sociologists," in *American Sociologist*, vol. 4, pp.332-335; R.N. Broadus, "A Citation Study for Sociology," in *American Sociologist*, vol. 2, 1967, pp.19-20.
- (3) 引用分析については、山崎博敏「科学社会学における実証的方法」(新堀通也編『科学社会学の研究』, 「大学研究ノート」49号, 1981, 第4章)を参照。
- (4) 上掲, Oromaner, "The Audience as a Determinant of the Most Important Sociologists."
- (5) 新堀通也『日本の学界』日本経済新聞社, 1978, 159-167頁
- (6) C.L. Beeching, *A Dictionary of Eponyms*, Clive Bingley Ltd., London, 1979 (横山徳爾訳編『人名をルーツにした英語』, 朝日イブニングニュース社, 1981)
- (7) 学問的生産性や学界についての代表的著作としては J. R. Cole & S. Cole, *Social Stratification*

- in Science*, Univ. of Chicago Press, 1973; W. Hagstrom, *The Scientific Community*, Basic Books, N.Y. 1965; J. Gaston, *Originality and Competition in Science*, Univ. of Chicago Press, 1970. など
- (8) R.K. Merton, *The Sociology of Science*, Univ. of Chicago Press, 1973, pp. 508–509.
- (9) P.A. Sorokin, *Fads and Foibles in Modern Sociology and Related Sciences*, Henry Regnery Co., Chicago, 1956, 特に Chap. 1 (Amnesia and New Columbus) をみよ。
- (10) このようなエポニミーの科学的価値による成層的カテゴリー化をわれわれは, 新堀通也・菊井高雄・島田博司「科学におけるエポニミー現象に関する研究 — 天文学・心理学を事例として」『広島大学教育学部紀要第一部』第 32 号, 1983, 61–72 頁, において行った。
- (11) D.W.G. Ballentyne and D.R. Lovett, *A Dictionary of Named Effects and Laws in Chemistry, Physics and Mathematics*, 2nd. ed., Chapman and Hall, London, 1970. (竹山協三ほか編訳『人名のつく現象と法則の辞典 — 物理・数学』, アグネ, 1980), 押田勇雄編『単位の辞典』新版, ラティス社, 1965
- (12) W. Kent, “Scientific Naming,” in *Philosophy of Science*, July 1958, pp. 185–193.
- (13) D. deB. Beaver, “Reflection on the Natural History of Eponymy and Scientific Law,” in *Social Studies of Science*, vol. 6, 1976, pp. 89–98.
- (14) E.G. Boring, “Eponym as Placebo,” in his book *History, Psychology, and Science: selected papers*, John Wiley and Sons, N.Y., 1963, p. 9
- (15) Boring, *op. cit.*
- (16) W.F. Ogburn, *Social Change*, Heubsch, N.Y., 1922, pp.90–122; W.F.Ogburn and D.S. Thomas, “Are Inventions Inevitable?” in *Political Science Quarterly*, vol. 37, 1922, pp.83–98; R.K. Merton, “Singletons and Multiples in Science,” *op.cit.*, chap. 16. なお A. Brannigan. *The Social Basis of Scientific Discoveries*, Cambridge Univ. Press, (村上陽一郎ほか訳『科学的発見の現象学』紀伊国屋書店, 1984), 特にその第 4 章をみよ。
- (17) 以上の例は Boring, *op. cit.*, による。
- (18) D.J. Coon, “Eponymy, Obscurity, Twitmyer, and Pavlov,” in *Journal of the History of the Behavioral Sciences*, vol. 18, 1982, pp.252–262.
- (19) 島田博司「Scientific Creativity 評価の研究 — 単位(unit)にみるエポニミー現象を事例として」, 中国四国教育学会『教育学研究紀要』29 卷, 1989.
- (20) 中山 茂『歴史としての学問』中央公論社, 1974., 第 1 章「記録的学問と論争的学問」
- (21) C.P. Snow, *The Two Cultures and a Second Look*, Cambridge Univ. Press, 1954 (松井卷之助訳『二つの文化と科学革命』みすず書房, 1965.)

Eponymy in the Reward System of Science

Michiya Shimbori*

Citation counts have been firmly established as a method for the evaluation of the quality of scientific productivity. However, while citation represents a recognition by colleagues of a specific discipline, applicable mainly in natural sciences, eponymy is often granted for recognition of the 'total' achievement of the eponym by a much wider public in social sciences and humanities as well as in the natural sciences. The eponymy becomes an enduring objective form in general use, while almost all achievements cease to be cited a few years after publication.

Similar to SCI as a basic data for citation counts, recently published EDI can be used for eponymy analysis, which may throw new light on the social as well as professional recognition of scientific originality in the reward system of science. This article as a prelude to statistical analysis of eponymy by means of EDI, discusses the concept of eponymy, its significance to the sociology of science, its types and stratifications, its functions and its research hypotheses.

*Director, R. I. H. E., Professor, Faculty of Education, Hiroshima University

